

OPEC+体制の中間的な振り返りと直近の変化

計量分析ユニット 野口 正義

1960年9月に創設された石油輸出国機構(OPEC)は、今年9月に創設60周年を迎える。長い歴史を誇るOPECだが、とくに2016年12月から現在にかけては一般にOPEC+と呼ばれる体制が敷かれてきた。国際石油市場がコロナ禍の影響の下で激動状況に陥ったが、その中でOPEC+が果たした市場安定化・原油価格下支えの役割を、OPEC+の体制という観点から、改めて整理してみることは有意義であると考えられる。そこで本稿では、過去4年弱にわたるOPEC+体制を中間的に振り返るとともに、同体制を取り巻く直近の変化を見てみたい。

1. OPEC+体制前史

2010年代に入ると、シェール開発技術の導入促進に伴って、主に米国でシェールオイルの生産が活発になった。2014年後半に市場の供給過剰感から急落したBrent原油価格は、それ以降約2年間にわたり平均\$50/bbl程度の水準で推移し、産油国の財政を圧迫した。このなかで、サウジアラビアは主要な産油国間の協調減産を志向したが、ロシアは自国の石油産業が民間主体であることから協調減産への対応が難しいという姿勢を示し、イランも制裁解除後の生産量復活の優先を主張するなど、産油国の足並みが揃わない状況が続いていた。

関係国間で数次の話し合いを経たのち、2016年12月に開催されたOPECと非OPEC産油国の閣僚会合にてついに『協調宣言』(DoC; Declaration of Cooperation)¹が採択され、一般にOPEC+と呼ばれる新たな協調体制が始動した。このDoCでは、OPEC+(一部の国を除く)が一定期間にわたり協調して減産することが規定された。

【図表1】OPEC+構成国一覧(2020年8月現在)

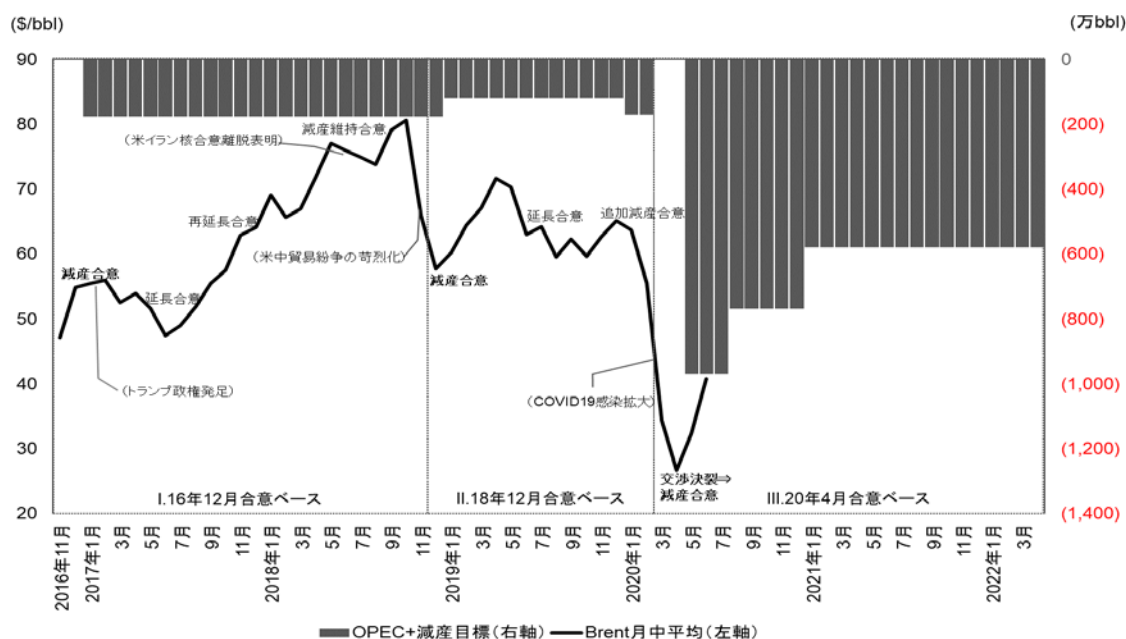
OPEC+	
OPEC	Non-OPEC 10
1 アルジェリア	1 アゼルバイジャン
2 アンゴラ	2 バーレーン
3 コンゴ	3 ブルネイ
4 赤道ギニア	4 カザフスタン
5 ガボン	5 マレーシア
6 イラン	6 メキシコ
7 イラク	7 オマーン
8 クウェート	8 ロシア
9 リビア	9 スーダン
10 ナイジェリア	10 南スーダン
11 サウジアラビア	
12 UAE	
13 ベネズエラ	

¹ OPEC ウェブサイト” Declaration of Cooperation”(https://www.opec.org/opec_web/en/publications/4580.htm)

2. OPEC+体制の中間振り返り

OPEC+体制下での減産目標とBrent原油価格(月中平均)の推移を表したのが図表2である。

【図表2】OPEC+体制下での減産目標とBrent原油価格(月中平均)の推移



*各種資料より作成。将来の減産目標値は2020年8月時点で得られる情報による。

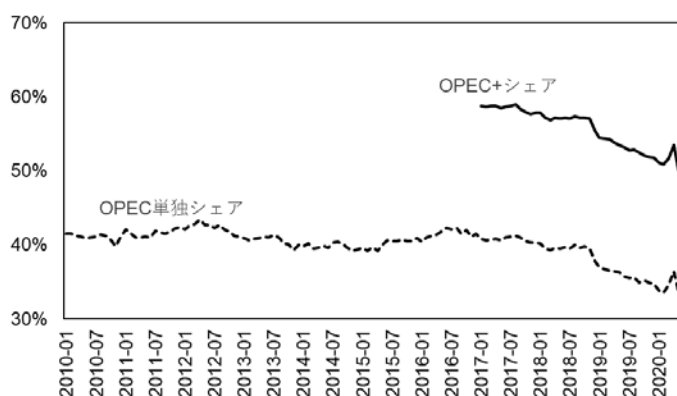
2016年12月から2020年2月までの間に、2回の減産目標の合意と、それに付随する終期延長や追加減産が決定されてきた。結果をみれば、同期間にわたり Brent 原油価格は平均 \$63/bbl 程度と減産開始前の約2年間と比べて高い水準で推移した。ただし、この間の意思決定過程は単調ではなく、たとえばイランが自国の減産目標案に抵抗を示す、体制外の米国が減産を緩和させようとするなど方針決定を巡り様々な意見が上がっていた。そして、サウジアラビアと並ぶ体制内の大産油国・ロシアも、「油価が上がりすぎると米シェールの増産や自国通貨価値の過熱を招く」などの懸念をもち、減産の度合いを巡ってサウジアラビアなどと意見を異にすることもあったとされる。

2020年3月に減産措置の継続方針を巡って OPEC とロシアの協議がついに決裂し、これを受けたサウジアラビアなどが一挙に増産に動く事態に発展した。ここに2016年末から続いた協調は崩れ、体制は新たな局面に移ったと言えるだろう。折しも各国で COVID-19 対策の移動制限措置が取られ世界的に需要減退が見込まれる時期であったため、石油市場で供給過剰懸念が急速に増幅し、油価が暴落したことは記憶に新しい。事態を深刻視した米国の仲介もあり、OPEC+は4月上旬に緊急会合を開き、長期的かつ多段階的な協調減産に合意した。ただし、同会合ではメキ

シコが「構成国に一律の減産率を適用」という素案に反対し、最終的に同国のみ他国より低い減産率目標が適用されるようになった。OPEC 自身も史上最大級と自負するこの協調減産は、5月から実行に移されている。JMMC(共同閣僚監視委員会)の報告によれば、6月時点で全体の目標遵守率が107%に達したとされており²、今後も減産が続く見込みである。

以上の OPEC+体制を中間的に振り返ってみると、まず、量的な側面に注目するならば、OPEC+の組成によって市場に対する存在感は増したと推察できる。図表3は、2010年以降の世界の石油生産量において OPEC 単独および OPEC+からの生産量が占める比率を示している。

【図表3】世界石油生産量に占める OPEC 単独/OPEC+シェア推移



*OMI 誌データをもとに作成。ただし、OPEC+シェアは OPEC 生産量にアゼルバイジャン、カザフスタン、マレーシア、メキシコ、オマーン、ロシアの生産量を加えて算出。バーレーン、ブルネイ、スーダン、南スーダンは実績値が無いため除外。

これを見ると、2010年から2016年末にかけての OPEC シェアは40%前後で推移していた一方、OPEC+シェアは50%台と相対的に高い水準で推移してきたことがわかる。協調体制のもと2016年末から2020年初まで相対的に高い油価が続いたこと、協調が一時的に崩れた2020年春に油価が急落したこと、そして再協調とともに油価が上昇基調に転じたことをみても、この体制が油価に対して一定の下支え効果をもたらしていたことが伺える。

一方で、体制の構成国数が増えたことで、意見集約はいっそう難しくなったと言えよう。構成国の意思形成の背後には、各国の国内事情や国際関係も複雑に絡み合っている。それゆえ、共通の目的のもとに一致団結できた場合は強いが、時間の経過とともに個々の事情の違いが前面に出る場面も見られた。2020年春のコロナ不況と油価暴落によって多くの構成国が強い危機感を抱いたことは想像に難くないが、上述のとおり、このときさえ完全な一枚岩とはならなかった。今後も、構成国の感染再拡大や財務余力の状況、外交政策などの違いによって、足並みが再び乱れる恐れもあるだろう。

² OPEC ウェブサイト “JMMC sees improving market conditions and conformity levels”
(https://www.opec.org/opec_web/en/press_room/6060.htm)

3. OPEC+を取り巻く直近の変化

最後に、創設 60 周年を迎えた OPEC と OPEC+を取り巻く直近の変化を簡単にみてみたい。まず、OPEC 自身の現状認識であるが、事務総長は IHS Markit 社のインタビュー(2020 年 7 月)³において「今般のパンデミックは健康問題に留まらず、広く経済や環境問題、人間社会の在り方を変革しうる」とし、「既存のエネルギー・気候変動に係るガバナンス構造を見直し、環境にやさしい社会への移行に即した構造に改める必要がある。OPEC も 60 周年を機に、世界の変革に適合していく」と述べている。OPEC ウェブサイト内では創設 60 周年記念特設ページ⁴が準備されているが、8 月初旬現在、そのコンテンツは公開されていない。本ページにて、変革に向けた具体的な青写真が提示されることを期待したい。

翻って OPEC+の周囲の変化を見てみると、まず、ブラジルが OPEC への加盟を検討していることが挙げられる。今年 6 月に OPEC 事務総長とブラジルのアルブケルケ鉱業・エネルギー相とのあいだで TV 会談が開催され、ブラジル側から「OPEC との対話と協調を継続する。また、来夏の第 8 回国際 OPEC セミナーに参加する」とのコメントがなされた⁵。OMI 誌によれば、2019 年 12 月時点のブラジルの石油生産量は 316 万 bbl/d 程度とされ、UAE に匹敵する規模を誇る。ブラジルの石油産業は加盟に対してそれほど前向きではないとされるが、仮に同国が加盟すれば、OPEC+の量的な影響力はさらに増すだろう。しかし一方で、有力な構成国数が増えるほど、意見集約がいつそう難しくなるリスクが考えられる。

他方、外部環境に目を向けると、上述のとおり昨今では「クリーンエネルギー社会への移行」が世界的なテーマのひとつとなっており、産油国にとっては「逆風」となる脱石油の動きもトレンドになっている。IEA のビロル事務局長は今年 7 月、「クリーンエネルギー社会への移行に際して、もっとも大きな影響を受けるのは石油産業だ」「産油国は、モノカル経済から脱却すべき時期を迎えている」と明確に指摘している。

石油は多様な用途をもっており、少なくとも近い将来では世界経済において貴重な財であり続けると言えるだろう。今年 3 月に石油市場に波乱が起きた際、米国などがただちに仲裁に動いたことを見ても、その重要性が端的に表われている。しかし、OPEC+内外の状況が急速に変化していく中、現在の石油の貴重性が中長期的にも維持されるとは限らない。世界の経済・社会変革に適合しつつも存在感のある OPEC+をいかにして作り上げるか、今後も関係各国の舵取りを注視したい。

以上

³ OPEC ウェブサイト “IHS Markit interviews OPEC Secretary General on oil market developments”
(https://www.opec.org/opec_web/en/press_room/6042.htm)

⁴ OPEC ウェブサイト “OPEC 60th Anniversary” (<https://anniversary.opec.org/>)

⁵ OPEC ウェブサイト “OPEC Secretary General holds video meeting with Brazil’s Minister of Energy”
(https://www.opec.org/opec_web/en/press_room/6020.htm)